



門 八  
號 1242  
卷

14.2

北平圖書館藏

通志卷之四 漢志記



外國叢書

十八

魯西亜國漂流記



魯西亜國漂流記

○陰奧國牡麻郡石巻港海を平し出る所あり船着宮  
 丸の國守より江都へ出るる船と揚木を積船して船名  
 水士未十六人あり定改む年癸丑十一月廿七日假令解  
 海に浮み其日、東名の浦へ船を寄日月廿九日、  
 試みの帆吹たれ、帆を揚帆せし、西の風強  
 吹たれ、日必岩陣原へ陸地し、舟名の浦へ渡り流  
 帆の習ふを待し、十二月朔日、舟名乃風吹き、  
 舟名舟名を乗船り、先石巻へ来り、舟名と風を  
 待し、帆を揚とせし、舟名向ふし、舟名子計刻、舟名  
 舟名吹き、舟名吹き、舟名吹き、舟名吹き、舟名吹き、



又も辰巳の方風より大風乃如き波あり船をゆり  
 上り申す船は二三度まく浪のりし船ありしに船折  
 取をあやめし船は船にあくとせんがせんを驚きし内野は  
 言はせしるれは足取を軽くせんあつと橋を代捨  
 積し舟の米苞を海中へ投捨し船を流ると傷し  
 即二日とも西の方風より波を登りし海より浮り  
 沈り風力まふし吾もしを伸し吹放され東西の方海  
 流極まれ大神多し新船を純神國を流ししよ  
 百七十里洋中へ申し三邦國出し申し余他一日よ  
 心を苦ししあぬ又取し何れと橋を代捨し折れし  
 舟より船を圓ししり行要ありと名をよみし船力を

勵し何とそしし米四五月以日申し地へ流れさせ  
 海はししと神より新い舟し新船の禰子船あり  
 洋中より深い船より日月ありし浪風強く  
 廿五日ましく風極ありし米廿六日より大風吹  
 止付かす既し破れしとすし事ありし船の力を  
 浪りの命と足悟と極ありしかきせし船より一  
 凌り申し何んしとをせし船より二層川に（せしせし）  
米苞山を結舟船の 船せしふ船よりしと云 大神多し新し由宿を流しし二百七  
 十里乃洋ありしを更し波よりわれ風より吹れ大風  
 を流し居しと申し船より四月十日より米よりしと云日  
 大風起りし波の船ありしと申し船の船を

舟破れしを分り浪に取れとりとれ 又櫓をも打破れ  
舟中より垢水の流る所三四尺ありしを  
絶つて形を汲出さず又麻袋にて船の洞を敷き  
老もたすを仕を固くし板を又神意を  
五百里沖へと先より三月十七日まじりし  
大洋に漂ひ居る今この洞をき一滴の清水も  
渴死をき神を祈りし中右潮水を汲取れば降  
せむと天を拜し又また情所ありしを  
かき星ありありと天の威徳の難を半後  
かか候儀を告ぐし事あり一日の命を  
陸地へ漂ひありしを頼むと幸力門形を

あり器を何れなく船板の上並く上への儀を  
舟に載せしを四方をめぐりし海の水の色  
と聲とありしを何と云ふ所の海を  
久しと一舟あり四月廿一日毎に神意を  
頼むし二百里或は二百里或は百四十里と  
陸地へ近くなりしを五月九日神意を  
十五里ありしを五日一日を候い勇み十日  
西の方をめぐりしを浩くしを重信ぬしと  
そり右方往し五月のまじりしを  
山々 日中より何れを何と云ふ所ありしを  
ありしを陸地へ船ありしを

本邦へ至るありき人々を御を痛むを苦しむ  
一内は山と沢ありてくろくろく名ありつとあり  
おのれ國ありとし上陸するはかたきなり  
生たぬありとありていさや先住より人々を  
破を沈陽より来るを破し小島のより瀬を  
そとくそとくそとく人々の住りありて  
そ破をそとくは破し一内は十口の新破を  
本邦をそとくいけし新中破れ破しそとく  
そ形の御しそとくそとく一本をそとく  
そとく船のありて二百餘口の内十六人の余り過  
陸しそとくそとく破れぬそとく再いそとく

所ありて候しそとく一日新と別れしおのれ  
神そとく候し所ありてそとくそとくそとく  
そとくそとくそとくそとく本邦の地ありて又  
乃北ありて神宮ありてその事ありてそとく  
二本の神宮を大神宮に捧ぎそとくそとくそとく  
そとくそとく書しそとくそとく又人里ありて  
そとくそとくいそとくそとくそとくそとくそとく  
そとく神を捧ぎそとく一本をそとくそとくそとく  
そとくそとくそとくそとくそとくそとくそとく  
そとくそとくそとくそとくそとくそとくそとく  
そとくそとくそとくそとくそとくそとくそとく

徳島県史記卷之六  
紀伊

樽と云は浪荒く又と為降ふり日浪舟を陸へ  
揚草系ゆゑのけちたれ形く希りと云ひし  
六月廿二日をくをく之海子人の妻とお申  
相えくしゆいふをよ免者よあ能く之れ人の  
されとも 既と斬髪すしゆと多れ相又い歎めはと  
云一を岩懸の怖きしゆと入しきか一色世よと  
所の鬼くあふふけは陸へ上らぬ忽ち彼鬼を捕  
られ何とあんと必定ありしゆらの事と知らば  
中邦に在る親兄弟妻子女をりい送るく何や  
ゆゑに船の居ゆやと帆の影をりゆ毎に海色(出)と  
ゆゑにんと云は悲しきやと云く又と云く鬼の

徳島県史記卷之六  
紀伊  
紀伊

おと客とれふんとおとく白骸慄くして遠の村に合は  
誰と云くをと出にゆのりか恍惚とて舟と云く  
良所と云は彼鬼と云くしき人十四五人集り出り  
と一上座と云頻りよよ拓きせし陸へ揚り  
と云くしや何と云くしや 家園の神の心  
陸へよ如くおとくしき岩懸志神宮二本書を記  
洋祈念し取降る古書を完き之れ陸へ上り  
吾と云く海あれいしや水を多すしと流る漕  
引たれ鬼とおひし人海へ浸り船を陸へ  
引揚られ彼と云く持運ひなと云く之れと云く水に  
色せしと云く舟人とお申しき人古水成と云く魚を





の湊つられの浦へちりとも船を寄碇原を拓き藪の  
 よりも急かすしこれとわづはを境の孤島をれいせら  
 のよりし叶とん唯代くは松樹のことりらるるし  
 同日八の鐘より島泉の鬼とちりし思はけりあさるる  
 かささとも控置けりあさるるいそのさりし穴を穿ち  
 燈色の送りのまの似しをわし屍を埋色一隊の良  
 かしとやぬ同日十二のよあられは先より知るし  
 人あつて魯西豆人の居し下へ日付をいしと彼陽  
 空りる所より日廿二日よそこを船中し初て着  
 をお所も島まゝこも定住居へ大々天火を起て  
 葉へ移し一編を靴の形ちりしと赤銅と志送し梳をよを

形しと不危を無真意を倉とす路は冠相あつて  
 復たか一人りあさるるしとちんは住みけり人し  
 指くアリマと云こしりしナアツカへ  
ナアツカはラニラ  
ウイの内山名 遊覧を  
 こしと航は海路廿七里をとも

ナアツカはラニラ  
ウイの内山名

○庚六月廿三日ナアツカへ到り日廿四日此所を船出をけり島ハ

セーブル  
ナアツカはラニラ

セーブル  
ナアツカはラニラ 此より魯西豆より船更を直されとも島人の風

俗は是まその島とて等し海嶽多く船尻アサラシ乃  
 属し叶はを思はんと魯西豆乃船中より高船一航渡来  
 居りし倉物も莫れ色あしと鮭鱈の乾又 中邦よ

西の船の改人の名をト  
ラスイワイイカウロロと云ふ

くしんせせは魚のり 此島は寛政七月より四月の年  
四月より滞りて一ノ魯西画の船乃改人の名をト  
日中の人去来を常宿とすれのかく要路のりを宿  
すり有る顔色其義しき名数を先ふ改めをこの年  
此島に在りて法敷はを買集めを業とす是迄  
一年まで用て置り年限は改れ又買集めは船に在り  
されとも日中の人仕地を多く是を止るあり一人  
余物にすしと名つけ傷りまきり又改めをすしす  
交易のすしれと利をまきりしは改め一人の余  
買物細一用して今を交易とす中国の方日は是れ  
を船に宗務せしは利がわたり人乃目をしきり

是の島は寛政七月より四月の年  
船に在りて置り年限は改れ又買集めは船に在り  
すり有る顔色其義しき名数を先ふ改めをこの年  
此島に在りて法敷はを買集めを業とす是迄  
一年まで用て置り年限は改れ又買集めは船に在り  
されとも日中の人仕地を多く是を止るあり一人  
余物にすしと名つけ傷りまきり又改めをすしす  
交易のすしれと利をまきりしは改め一人の余  
買物細一用して今を交易とす中国の方日は是れ  
を船に宗務せしは利がわたり人乃目をしきり

是すは改め世乃人の常宿は魯西画の部より一葉  
九千里の大洋を渡りありあり是れ改め他島乃  
漂民を憐れし業をまきりしは改め一人の余  
買物細一用して今を交易とす中国の方日は是れ  
を船に宗務せしは利がわたり人乃目をしきり  
この一日は船を揚ぐありは憐れし業をまきりしは改め一人の余  
買物細一用して今を交易とす中国の方日は是れ  
を船に宗務せしは利がわたり人乃目をしきり  
是れ改め世乃人の常宿は魯西画の部より一葉  
九千里の大洋を渡りありあり是れ改め他島乃  
漂民を憐れし業をまきりしは改め一人の余  
買物細一用して今を交易とす中国の方日は是れ  
を船に宗務せしは利がわたり人乃目をしきり

をわの曉の如く横雲相引を知らるる  
因つてその子を魯西馬の人の導きしよと世界の  
中よりを空より運ぶられたり日輪南の東より  
行旅し西南より来る形に如く故に極寒のよ  
るを言ふ一星を此を新出アミセイツ  
カを指す未申の針を取紙けはる海路千二百  
余里とす

○五月十二日アミセイツカへツカト云へる船を寄せし  
ころより魯西馬より船吏を遣はして伊勢國白子の  
幸右衛門船長は島へ漂ひあり二年の月日を送り  
しとす(一) 是を(一) 中より船出カムサスカ

長崎より北の海路千  
二百とす(一)

を指す 申酉と紙せし 此方の海路又二百里余と  
と云

- カンサスカは南の船を寄せしヲホフツカを指す  
成の方へ船を寄し海路千二百里とす
- ヲホフツカへ六月廿八日ヨリ別家小川へ船を寄し  
ぬ此処より魯西馬より船官を遣はし船長三十四  
余里とす 往由乃高し船長と交易をする 倭に  
家臣を遣はし乃二方を別り船長合舟船の如く船長  
を遣はし極寒とす 大材を遣はし船長を遣はし二  
人を遣はし山岳を如く厚き板を以て船長を遣  
出入の口も厚き板を遣はし船長を遣はし船長を遣

以て張るる申立松と桜もくくは是地を極る極る花  
 吹ひかく倉物の魚乾も歎の因を考とあり大麥  
 小麦をも飯の如くは兼しとせしり用事之世名ふ十  
 ケ月なりと遷移せし。ヤツコウツカへ別ありしものより  
 ろく五人了り門知れ之度よ出まし。陳年よふ辰四月  
 四日よこを立出候是よりヤツコウツカまで道路千里  
 所行のしつともを火と系燈しとて人の住居は  
 しかく是と名付しをかま一人住あくること十せと  
 出し名をもとせり。ゆふあめの馬ふた倉物も負せ  
 候ふ多れは燈より四れい。道を急ぎしと七八  
 百と申候人と是より一匹馬十足斗り發せり

眼をきしりしつらうか

五市社丸の病勢りく  
 左邊源を引いばは病  
 院へ移らせし。一應氏もヤ  
 コウツカ出之此に候し。ヤ  
 コウツカはくさし。一應氏セ  
 し。

○辰六月五日ヤツコウツカへ別あり。此もを敷敷と千  
 四五百軒在る魯西重より長官を急ぎの政と目  
 とし。一む家仰ちヤホフツカより。倉料をヤホフ  
 ツカより。少く。水更市五日。病ひ。昔  
 後。起り。す。時。す。夏。名。乃。人。と。あ。り。ぬ。是。ま。く。成。候。の  
 憂。を。凌。ぎ。保。ふ。市。邦。へ。再。ひ。ま。り。ん。と。あ。り。な。し。終。ふ  
 夕。あ。り。候。り。合。ひ。し。人。の。か。く。と。う。か。く。事。行。し。り。の。力  
 此。し。く。又。今。甲。の。人。の。身。の。と。ゆ。ら。く。家。事。は。し。と。名。の。い  
 後。し。て。是。籠。く。一。日。を。ま。を。揚。ぐ。こ。い。と。ら。り。な。は。な。世。世。の  
 此。れ。の。ま。を。せ。し。と。し。こ。い。と。ら。り。な。は。な。世。世。の

是年五月廿七日  
山王江

そのふたれいさぬの人もさし袖をもぬけ  
こゝの序旨をいひ一月及ひはるは是よりイ  
カとゆへに却りて七月五日より五日  
村に結家しきし馬をも多量しをいせり  
そ中トノコウスアエウチイと云所乃人主敷の位を  
そとあし魯西臣乃人ともたは別とせりイリカウ  
カへ二千五百里行つとを

○辰十二月廿四日 イリカウカ 入家敷三千四百軒  
在る繁花乃地之庭所を並に友を居る園を  
目しむ別とせり方を知りて浮氏十四人を  
口申譯目乃家名居りせ根柢料と号す一人を

是年五月廿七日  
洞

一月を三枚り今年の同を與ふと云又天啓倫  
羅沙わく仕裁一彼山風乃衣を以移りて入合  
料の大麦小麦北粉を解の如く造り細夕れを煮い  
又魚羊魚乾を塩煮の如く煮の油を以塩梅をつち  
合とすす彼麦解を煮りて煮るに煮る合す  
煮物に磁器を煮て徳子の如き物を以て煮る磁器  
本邦乃相馬焼の如く煮りて煮る上品乃物を他  
邦より渡来をふりて煮るに煮る塩の山雲  
の丹戸より海水を煮りて煮る所を供へ味  
習他になし酒を煮りて煮るに煮る味  
高辛くく酒を煮りて煮るに煮る味

化邦より海より来たるもの漂民の内侍を居るはるの小麦  
 を能く粒より酒酒を製し鬻り日本風の酒酒の味は  
 貞なりとく大に利をばう米麦一軒も出さず大麥  
 小麦の畑は他は他とも肥を蓄ふは穂玉とわたり  
 け三種の麦を産し中邦の如く附とせを付し  
 麻を多く出さふ留を耕すは澁を并ひす鋤り已  
 ○名酒乃酒より五々イムハニヤハニツケと云所之味淋酒と年  
 酒九年酒の類也

○家他と長十二三同横六七同位を商人の家の石を以  
 築立ふは地味を重なりを立へきわとの四方の地を以て  
 海石を入り美品の甚とく附より石を産すと家

多す多産するはものを柱を魚を以て石を以て築立  
 主柱の幅三四寸の狭く製する貴さを一  
 所の不丈夫なるは他と因り直に石を又人史のそり  
 多し夥し

○蘿蔔胡蘆葱根は河の牛房茄子かすはわの  
 人男女とも常は椅子をとりて座すは座すは  
 舎は言ふ人の人表を羅紗裏はソウツリと云歌の  
 皮を骨の中より以下の人を表は同しとて裏は  
 免板の皮は薄きと名は同しとて裏は鳥の羽  
 を厚く一人とて入皮は紙を温く抱は長と三尺  
 名は皮はく是も裏は鳥の羽を入り是は是の

枕を保すすあのみことと揚子のみこのいふ二人は  
枕の長短を定むる事と其身の法を中一と  
又婦睦愛余多しく日出夜も枕を保す  
外を食くとのま原を

- 婚姻乃法い悲いぬまの生男女保す寺へ行
- 和尚より告はす所和尚男子は對しき方の女の  
しれをまきし身法はまき家業をあらわして  
連保ふしきと同し男子保すの色遠くありて  
答ふれい和尚又女子は對いし方これとまきて  
生涯貞節を立行末業んとあやと同し女子  
保乃を遠くありしと答ふれい和尚亦答ふ

- 唱へり何れとけ酒音をわし種を女男女と病り  
しめ女子は昼を死らるる春法きし酒を男子は  
春を又男子は昼を死らせし春法をしを女子に  
やれいこれを春むらうとおねく燈候の式を海に  
又婦睦愛余多し歸り何ふりしと親族のいふ  
又ちうを隣知音の朋友を四口の古に振きまふ  
在るは答ふすあり
- 小児生れい他人を名の親と親重人の名の  
政事と身親の政事をいふ命是へい千といふ字を  
ちよ付ゆら周の協候
- 史記す何れをいふ身法はまを史と持ゆら



○又男子も妻死すか時、然り亦妻を一生持す  
福身あり、身許ふとのき人のまう奴僕めく、  
枕の長短の控をふりつらりとせ

○正月の元日の酒肴をいづく祝をなす亦年成と兵  
男女とし小遊生と一日を結の弁祝す尚と漂氏ホ  
えり、い何事古神宮第徳神取魂非、洗米を  
位入人と極月あま、並二合を夜を夜し、を價い  
本邦の物金を取ふと、又換り、と古百文、  
是を周より来り、をき、他邦より、換出、はる、  
價い、最貴し、有、大商人、を、所、の、中、人、の、  
考、く、値、い、む、は、と、い、とも、多、知、り、む、り、を、  
これ、を

○舟のありの所、

○此所より大川を、  
程々の奥を、  
中邦より、

○醫師乃病、  
用ゆ、  
酒、

○仕國の人、  
衣服、  
又、  
以下、

手織方の粗糸は本海一反（約二尺）は西の金まわ  
二両程の上糸の小糸は長吉短く價のよからぬ  
中より下細の人は長吉短く天琴織の類を常服と  
する人多く扱はれぬ

○はちの麻折は作り山更をサウタといふ又其の乃  
山更をカサアカといふサウタを中野の足腰カサアカ  
山人目にもいふは其の是おの人の横刀の如き  
もの一刀を有す鞘と獸の毛皮を官の人の  
紐を有しを紐をいふ飾りといふ

○婦女子は素練といふ全指環をいふ耳環とい  
ふ其飾は美譽をいふ

○漂民おの中使をいふ湯桶を儲け候は其の細を造り  
細を中野といふ但深は者その糸は右此糸の  
糸はいぬを真漢おの備人と申すは候はれり  
今この所より八ヶ年の年月を造りて投捨金麻糸  
より糸より右風といふをいふは衣服の料をい  
わぬか業をいふを價といふにけし乃人の  
何れも扱はれずは体是の所然物といふ口舌は  
いふを煙をいふとありて舟の風俗は漂民おの  
飾を彼の土人の如き人おのりては  
天琴織の價は早は是を常服といふは内庭の  
大夫おのりて真漢おの備り候は是をいふ



器

○漂民の内小竹濱古以所為其病之類  
 口を強ふるに似し流地を救ふるに似し  
 巧く一日に心疾痛めしは未だ年二月十日に苦  
 しき夢に似し何れを余かゝる再い本邦に在り  
 玉と足まき神に祈り佛に祈りて甲斐もか  
 くと死ねしむれされとも魂魄ハ此地を去り  
 本邦に却りてと云ふに夜に起るぬれし身を大  
 切にしりて本邦に三回死にぬれしを親族へ  
 語りしれ中悲歎をいふ或は長し流しと云ふに江念  
 佛に三遍唱へるに死にぬれしと云ふ夢を揚げ位悲し

○本他の家もたよりし夜に能く水と云ふ水と或  
 消防を主祀せしむる本邦の製作も水の勢い流  
 石造りの家も二階の火より二階より下を  
 火のあふ大急をよそ

○本邦の人を流しを生せしむれぬむ因風と能く宗古  
 を習を固れ其のよきと云ふ其の妻を流しを佛に  
 を既にかゝり本邦の人漂流し何れを  
 彼の國より書を要し一人の孫子を流しを救ふを  
 は古史あるに似しと云ふ流しに父を本邦の姫  
 しくを流しの人あつて種ありて子同  
 一邦魯西亞の人を眼才腫れ髪を流し本邦の人

人の流る服中すやふ〜時髪をけきけは固の  
人と是をさふり

○雁新より漂民の出るを由り〜いひまへんをさよ  
ゑ〜ぬれりよ世後初より早死折ふと〜口の中  
漂流人あり此地をさくを顔と〜す都に本  
有〜よと云ふ之のり、散是を〜といひまへんは  
と〜方と迷ねるへ何、何れと旅中の用をさか  
〜ふい年の年月と流〜るは悲をぬとれと云ふ  
〜ぬそれらの行へ喉乾若よは又遠別と云ふに  
多〜りよ、信を来い麦酒はとほふ麦の候を製、若  
と〜り〜を賣出らばと送別の人たも〜り〜

〜い魯西亜の人、俱し袖をぬ〜り〜らめり、雁  
昔〜はよ葬送の料よす〜と念をぬ報法二十ありと  
あ〜はゆり加信よて外枝よ飲め寺に送らぬあり  
門導を法に〜し宗名送〜し〜門導に〜あり  
漬物も多〜化邦の人、墓所へ並〜く葬り〜るは  
固〜漂はせ〜中邦の人、死〜ふを怪〜墓多〜く是  
〜ら〜られ〜固名各西形付〜あり

○イリコウツカよ寺殿ハ十ハ寺内、宗者ハキリシケイと  
〜ま〜つ〜の〜ハ〜寺、此〜ま〜香〜り〜内〜之〜別〜は〜別  
口〜の〜裏〜は〜異〜所〜を〜迷〜る〜ま〜ま〜く〜の〜是〜禱〜し〜是〜ハ〜  
或〜を〜人の〜活〜よ〜古〜ハ〜切〜シ〜ケ〜を〜宗〜し〜種〜の〜た〜ま〜の〜め

形いゝと云はしれどもそのまじく禁せられ宗古  
改められ今も石名儀あり術とすうゝうといひ  
由教も俗も等しき富神の技を乞とす神の富  
造りて福を衣の如く度く仕載し相を乞うる旨  
ふい肉を用い書事と技をとらよひ歎の肉を乞  
真肉といふと云ふ寺の中も神を乞ふを得るを  
板に書き西面を拭き其画像人す此を又鬼と  
阿と云はれしうゝぬ板の俗家も彼像あり  
信公湯作を乞ふ志人の海記を乞ふと云ふ工又  
ホジニ日本と云うやいと唱はれしを尋ねり  
日本あり南を所深陀佛と云ふと云ふと云ふ

日本と云うやいと云 釋と云ふといれまを御代

ら似

○曆を万年曆と云 何れ年を經るも形ありし  
一十年十二月の一日二十日と云ふ二月の廿日  
を一月と云ふ廿九日二十四日の月を國月と云ふ  
氣候を 本邦と云ふ遠くは氣候は命を 養ふか  
を曆の文字を知らずありし時といふ 又  
左か子年の十二月忽れ吹流られ海上に漂ふ事  
二百餘日なれは名を 河原に沈み其の何と云ふ  
庭の藤を乞ふと云ふと云ふと云ふ 何れと云ふ  
何れと云ふ 何れと云ふ 何れと云ふ 何れと云ふ

遠くぬかりと魯西豆あり別つては二月と見ても  
 二月と定めて月を見ても十五りと定めて月の廿日  
 立ると波乃月を山に九と二年と二百四十と定めて  
 年同じく國月十九日を加へて一年と一日月  
 日(長崎)船の入りは九月廿日の心算なりありあり  
 今日(ち)ちりあるゆへに同じくはよりありと名  
 ○魯西豆は十五年余存し内地産とす字を記す  
 或も人(字)の(字)は古物なり地産のものと載れんと  
 ○いふに(字)は(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と

○或婦人乃針箱を箱乃尾のとをる箱は尾のめき  
 之乃生(字)字(字)五寸半のみの款乃尾を又香い

ありありぬ物ありあり有者やと尋ねしは是れ  
 ○麝香の尾(衣)れを箱の箱は保し(花)を(花)を  
 除くぬかり(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と  
 報告の葉を心虫除へす此木の葉は何れもあつた  
 貫入(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と  
 (字)と(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と  
 (字)と(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と  
 必(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と  
 重(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と  
 ありぬかりと(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と  
 ○(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と(字)と

ほふ殿の子あれの史許すす殿の乳乃時ハを帰之は  
りのあき衣をきくまは保は法保をあらめを  
嫁れ衣被を直取くく暗社乃乃日黒方ハ坊の  
取の乳あえ何をとみ甘何れハ双方の史海の和  
詔い起し（あり）

は後大極度（？）の事  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく

○魯西臣乃女子ハ乳を極と取すまろハ小小史を音  
はるま牛乃乳を器上取り結ハ乳多の相もと乳房を  
極ハまハ牛の乳を極ハ取せ音つあて又牛乳子ハ  
麦の粉を結ハ器ハ音はるま牛園中ハ乳の凡極  
○茶ハ極上果の製ハ人ハ茶飲極付ハ必牛乳をぬハ  
喫茶（あり）

名法を悟ハ他と儒ハまろハ極ハ人ハ用之ハ  
役者セハ車の上ハ箱乃と手形ちハ補足ハ内ハ二人ハ  
ちハ馬ニ又ハとハ四ハとハ半とハ極極ハ全原のわら  
ぬハ小史後送ハととを急き倉まハ麦ハ解をま  
車ハ内ハ結ハ極ハ一ハくハ極ハ是と密ハ咽留ハ極ハ  
水を吞ハ極ハ一ハ休むハあハ一ハ車乃とまらハ極ハ  
動揺セハ右極極の痛ハ極ハ一ハりハけハ

○中邦ハ里極ハくハ四五十里ハありハ一ハと名ハ比トあり  
リツカハ一ハ利ハ不ハ時ハ最ハ極ハ二十ハ村余ハ在ハ皮極ハ一ハ  
上ハ店ハ人ハ政務ハ司ハ極ハ一ハとハ一ハ車ハ一ハ時  
まハとハ休ハ是ハ一ハりハ一ハ時ハ同ハ法ハ史ハ法ハ危ハ二人



奉の轉系音狗は書きを早きに眼畢送と  
往より叶とさるの渡送の山使を水舟をいし  
出をを往す此處は湖にぬ今を却り出  
又古イルコウツカへ降りしや知す

○へりマ此所より友吏来り以勢を日南とを能は  
結と市を往すの麻鹿を好い車よ今すは  
白體安うすすされたとく遠るを海の中  
出河かたせんまへく渡送の人よ引くと  
物しぬ石の巻を由りイルコウツカ上在り内  
出向し入向し果し音信取族より厚く睦い  
り希くんと志もせぬ地より一人跡しきりの悲

○此信を迷はし付とも今も狗やさう海にぬれぬ  
あゆむる石を焼く炭となす此處よりさ

○カサニは川原は所より雁野を置友人を居て政務  
を司らしむといふ故に軒余を清くさるは  
らまてまかりし法と文ありは所のみし  
回し

○ムスクの此所を中邦よりムスクセヤと標の所  
は古國主の都なりやと無花の地を路  
或は天參城在りし所なりと多く織出す  
と大さなる陸地は臨るを自然と埋りし  
より左の所と低くそりし石をさる

とて西へりり見ゆま七尺を一同とすて一同を石垣  
と鐘よの男凡そ尺をとしきゆりてを鐘を本邦の  
おろ大鐘一降鐘乃存せ給うして内使向を  
彼鐘並鐘いりわると見交しやとまら凡九四回鐘  
をいりて巻帯をいりて鐘をえ繞りていり並鐘四回  
二人こと作何りて又筒の口並鐘三尺鐘の大蛇  
三口並いり存りて鐘を大蛇にけりてゆりて  
それいりていりていりていりていりていりて  
馬よりいりていりていりていりていりていりて  
人をも書い並に送給ふゆりていりていりていりて  
いりていりていりていりていりていりていりて

○<sup>ハヒセルホルク</sup>セヨリホロカハ別はイリコウツカより陸路七千里ことを  
此所を國王の都なりていりて市街のなりていりて  
とし 本邦本都のまをわとわいりて 國王の殿園在り  
なり 堀堀あり梅ありていりて市街のまをいりて  
斗りの五階ゆるの殿ありて二階目三階目より馬場  
ありて五階ゆるの殿ありて樹木を植りて四階目五階目  
よりいりて硝子をもちていりて牡丹の園を化種あり  
送り花をいりていりていりていりていりていりて  
五階よりいりていりていりていりていりていりて  
いりていりていりていりていりていりていりて  
衛の人をいりていりていりていりていりていりて

あせ板津をかゝりてを仕歳の詰構つひを  
細

○西王乃名をラリキサニタラハウロイチユリタリと稱す深  
民ホ十人を國主の坐席へ出つと案内せしむ  
正好よりてんは多くの宿人陪後して列を正  
歳を正並居りて國主の傍にニコライハイチサ  
ノフとて人をして此人を官の人とててりて例を  
伊勢の西神昌丸の船子新免とて中邦の通詞と  
せり列居りて國主母后并子后妃の侍りて居り  
て國に漂民未賂を居りて中邦の船子新免と  
居りてこれより多かるに辭し復りて國主宮に

○汝ハ日本陸奥國のものありてを江此由に流れ  
て公愛をかくし船を習へ中邦へ送る居りてあり  
ありてめは愛を愛して公化しそ辨きいひて  
何れに傳ちて後には依て居て侍りて四人の一人は  
乃おむむき龍を侍合なり何事の中邦の御おし  
名りては此の國主龍をこまひ四人の一人の一人は  
名りてありてまをいひて龍の龍をこまひて控ら  
是れ日本國へ向りて夜といひてやうき志本とて大  
恨れを當りて無きをいひて又此の一人  
の一人は家をもとていひて深に死すなりて  
命ゆり今又中邦へ向りて人として行先をいひて

いろ形家愚は遠い余所らんもさう初稿一なる永く  
 中園は正夜とすも一六指子とあつとと定むる向し  
 あつれと又を仔細究るまほひ家の日中保固の文  
 一と版圖を弁名所古法と見えし一と余を記し  
 全法二十枚を版時時身を爲りぬ此所古法と階之は  
 一と年を存を仔細究る案内とて四階五階の一と一と  
 ○ 國主のあま由一母后后妃もま序止まむむひ  
 一と紫衣の上上階の母乃めき存き存る全階のあま  
 蝶杯の板紙を従いしとめきまて止まり難き一と  
 后妃古筆の以十六七筆も何れも一と美人多し一  
 ○ イルユウツカは八年存る一内本邦へゆへ揚る一と一と

親をまよとまよとまよとまよのほほのほとまよ一といふはねと  
 を仔細究るまほひ家の日中保固の文  
 一と年を存を仔細究る案内とて四階五階の一と一と  
 ○ 國主のあま由一母后后妃もま序止まむむひ  
 一と紫衣の上上階の母乃めき存き存る全階のあま  
 蝶杯の板紙を従いしとめきまて止まり難き一と  
 后妃古筆の以十六七筆も何れも一と美人多し一  
 ○ イルユウツカは八年存る一内本邦へゆへ揚る一と一と

國民はあつて國土の徳が——こゝろと感へ伏す  
又學を机を加ふわ——と居る勿論此を其を解  
るる人をもつたまゝおと——感へつとをけがぬ  
を所あり——

○三階目の橋より往り何れ世界帝國の人又多歎  
眞意を始れ何より以て考へし形あり相あはれ擁擁  
を扱五りりと酒を漬を好り干し——答むれは其の  
往りし朽腐はりのふ——とく其の人の内は百十二年  
に於て彼はへ漂流き——陸奥に氣仙の船更此處に  
死を——と干望り橋文にあつて是を衣をたれば本條を  
千種色と深きは取酸醬の紋を——系りてこれを鑑核し

利へは殆ど——とをけはを衣のふ——單——先は之は  
よ昔々あつた入を只いしと因に——とあひし  
二面の人の干しはありし

○日月の行是と遠南よる山極星と次より南よ  
る——とさう又所より八月より九月の比ま  
秋中より秋——と御まの徳を——  
色と括りたりあり——

○國王遊覽の爲風船を造り遊りて船を丸く——  
並に四回廻りありし——これを造りて其の骨  
從——紙ありありと後ありありと其の法  
紐二筋を糸と結い付二人乗る凡と吹れ候——



○小舟より大三日乗舟考も低く第廿七第廿八  
人而し能く名く魯西馬に任事し其を風俗是  
言語しをききしし一俣齡廿四五第を距るし  
多しと此中人の世考るし

○四月にわし世果又申ぬれぬる其の男女を神とて  
後系の所より群れ出で遊楽し酒肴を宴者  
俵幣の紙本邦の幣多ふなりとれらの所は水車のみ  
相へ之物の人を食せ酒を飲め其末をとり扱れ其を  
出さず人しを修り

○所より水車を仕掛向く表を粉を挽すなり

○海流はわし河れと蛇を之より見れ一切なり

○篝盤より能れとも上りよむありとて一樹十なり  
五むとあり

○鳥よ水より多所り出たてしと路白く啼也なり

○鳥の如く多れとも多志とれなり

○船を遠海より其形より出来ぬれは牛乳とて西歌の  
皮を外の通るし法法系を歌り長二回船力  
首を象牙より似たり其處へ彼角より海馬を象牙  
稱し南入りしあり

○小舟より船を遠海より航よりしと舟を供なり

○都下より二十七里を隔り而も国王御座の亭あり  
之を是の磨常石を交連し其為海とてし

泥古を踏止山の方より泥を堰た右石垣を築き底  
の石原を以てうきとせし源六方二十里御の池より清源  
の池水と流し其傍より廿二尺四五木九寸斗の鉄板  
以て築り之を正摺りて後け南の方より松栢柳檜楡柀  
を侘美邦の松木を種植す等と並へて前をうり礎  
子の障子を建てる事本花鳥の足透板子挿しし  
源氏も始りて之に對し神目と号すとしし

○權衡の桿乃志中へ紐を施し一方は上へ一方は下を  
重さ小位の多測乃當目甲乙とせし目方尺量とあり

○因王を約の市街より去中上幅一回半を切石を  
築き並りし此處石の上へ平へ踏みのを禁す因王

を約せし時と和羅を外の器物を賜ふ事あり  
わく人を及ぶる事ありつる事ありては輕き事あり

○通符轉流今と都より任し金二百五十枚の符を  
御り中邦乃文字を讀む事あり子位十四五人を任り  
し之を妻と姓と出まの娘より十二歳ある女子  
ありは小女名義ししてをらし其生れりし決を  
男子より四五歳に此後取らし通符を御し獲る  
ことし金百二十枚を賜ふ事あり此物並都下  
に在り左高より相多り安堵の名いをおし此物並  
和より奪らましは子け多し存しらるる在田中  
高死せし





金一枚 アセニソウウト 銀一枚 アセニセリソロ 銭一枚 アセニカヘカ

○金 アセニセリソロ 此金二十枚ヲ因テ其ノ物ヲ

所ナシセシムルニ其ノ物ヲ金一枚として銀二十枚に似ル

川撫として内海として 銀 表裏然金

日輪 アセニ 十文銭 アセニ 五文銭 アセニ 二文銭 アセニ

土 チムラ 王の名アリキサンクラホウヤイチユリタリ

役人 ゴロニチ 申上ルと云ふとツカシウ 銀 セリヲヤ

銭 セニキ 銅 ノイワナ 神佛 ボウホ 寺 セリフロ 男 ムセリ

女 アセニナ 木 ゼリソ 海 モウリウ 川 レカ 山 ナカラウ

雪 スチアカ 寒 シトラノウ 船 セウツナ 大 マシテレイ 鍛冶 エチイ

鉢 サストハ 鍍物 ノウセキ 梳 チヤアシカ 茶碗 キヤエチヤマレ

盃 リヨシカ 米酒 ウイナ 麦 コロハ 紙 フマアカ 牛 ユヨリ 馬

コウ 墨 ナリシサ 茶 アセニ 筆 アセニ 薩 アセニ 葡萄

ウイ チカ 人參 モロユウ 葱 ロツユ 烟草 タバコ 烟草

花 アセニ 博奕 アセニ 靴 アセニ 靴 アセニ

○漂民 アセニ 舟 アセニ 漂 アセニ 舟 アセニ 漂 アセニ

魯西亞の都をく 國 アセニ 國 アセニ 國 アセニ

高人の情 國 アセニ 國 アセニ 國 アセニ

志乃 魯西亞國中

商人の改人な命を家へセリホロカ出立の言  
是より数年の恩保を蒙りしは商人の命を  
謝を成しと行し一夜を泊りしは商人の命を  
命を成しと行し一夜を泊りしは商人の命を

○魯西亜の魂を多るる六月の日は因法を  
寺に法を奉を産ししは和邦の如く魚相を設けり  
○敵國の兵船を多るるを防備乃るべき百回余  
の階造りの兵船を設けり石火矢二百六十挺を  
備ふ余出り付る千五百人の軍士を多るるとは  
丸二りしは六百費用を多るる救済するは麻細  
のたさ二尺七寸とすもまはそれ代五百人宗千人衆の

軍船を多るるを家らイルユウツカ在留の中敵  
國より多るる度押寄を多るるは海陸の位を  
處を設け防敵のつは揚利を多るる

○去年は七月十五日セリホロカを立出川船を多  
カナスタの右邊に別にお軒通信の市船の時  
十石の宗移り七月十八日は碇を揚り未申を  
拾し航を多るる海路二千五百五十里

○エツベイカニウツケと云 別は此國別を多るる  
は所を救一方新やを在り法園の高取集會の  
大港より警昌の地へ船を多るる多るるは  
セリホロカは一日は多るるは一日は多るる

セリホロカ

こゝろく積ありし物を賣大麥小麦の粉或は菓  
獸の肉を燻へ同年七月廿八日船も来申し針を  
三海路千五百里を航ふ

八月九日ヨアン

○八月九日ヨアンキリツケへ船を寄は此所一島圍

ありしと船り着く所を救救四千五百軒ありたり  
主船ハ七リ路を隔りしを日月十有船を由り

十二日の船を出り

○九月二日カナリヤツケに到ふ此島ハ馬ハ多く

鹿の如き獸有り路ハ三角を以て多くは枝を以て  
く 中邦の海人も亦又荷物も積を待てる毛色ハ

白黒ハ色くまう日九月九日はを船中一南アメリ

カを指千九百里の海路を己午ハ船セしは海  
上はより傳音のつはち世のハ世界の出し  
ありしと酒香を燻へ船中の女の容一後しき

○十月上旬南アメリカの中エカテレとハ津へ船を寄は

はあめ人の多き島ありし男ハ中邦乃象腹ハハ  
めき物を是標し上ハ裸あり是故あり婦人ハ  
腰は多くの物ありしは 諸所あり路を是所為の  
物を肩を以て是と指し結ハ路ハ男女とも 諸處  
螺ありしは必標固りしは 麥斗りきりてを多く米大豆  
小麦その他は諸穀中熟し後ハ此菓ハ一年ハ二夜ハ  
多ク唐黍ハ一夜耕とハ一夜花と云きし一夜草と指ふ

と云ふ國と云ふれ、本邦乃草園の如く是れ多岐な  
 の如く事なる唐土と云ふは、焼くとき乃木料の  
 衆の如く石をいひて、之と云ふは、造りしも、  
 板の如く、骨戸障子といふものか、此の如く衆生  
 無常性の地と云ふ、オロトカリ又此の地  
 のオロトカリツケと云ふ國、オロトカリは、  
 寸法人をいふ、と云ふ、又ある者は、  
 オロトカリツケの國と云ふ、由生、  
 ○梳と柳子の實を賣る者、  
 笑くこれをいひ、  
 尾を、木と云ふ、

あり、又山を、六段の危を、甲の二を、  
 此國は、海路、四十五日、  
 取積む、十二日、  
 國をいひ、  
 申す、向と云ふ、  
 此國は、  
 女人、  
 此國は、  
 國をいひ、  
 此國は、  
 此國は、

○子四月四日マリケイヌレハ判事付出た大人因り  
男子の丈ハ七尺四五寸ありハたは及ぶ婦人も古く  
噴出するく若くはるく男子を陽物此先のはを  
細き糸ゆく信の婦人の腰に細き糸を纏い  
糸糸よ糸糸葉を巻れ陰のを隠し隙を交を  
帯き婦人他の男子と不義行つても信巻れ  
是く不の草は葉をぬぐ花されは信の丈の時  
を羅と許は糸糸糸糸葉をぬぐ花されは羅と  
女人高し流す糸糸此投くと交り信婦人の信  
本島の信事行所と此信同の御大人出のり  
其園を出船すれハ信もぬぐ海中のまきり糸水

の前行これ天竺流沙川の水先こといひは  
〜は信婦の心裏は〜まおのり〜は信  
を巻く〜

○マリケイヌレハ信人信家ハ信ハ川上侵すは  
岩穴に入る信は信者信者信者信者信者  
信後を信〜信〜信〜信〜信〜信〜信〜信〜  
とす信信信信信信信信信信信信信信信信  
を年信信の信信信信信信信信信信信信信  
信信信信信信信信信信信信信信信信信  
信信信信信信信信信信信信信信信信信  
鬼信信信信信信信信信信信信信信信信

傳へ彼大人の之れは海舟を之く水を取らるゝ  
とのよりきくく船へ大人由是りし船へ寄附事  
しと石火矢十二口を放ち潮水を取らてカムサッ  
カへ船を向く船へきくく時海路は何れをいふべき  
是といふ け島のよりより  
妻はたはし

○カムサツカ魯西亜より官吏を遣はすに志ふ打年  
ラニテライツケより商人船に乗せし魯西亜國へ  
し時此色をさるゝく大妻小妻とも魯西亜より  
送ふ所ありたるに外多敷の内奥の船を幸か  
名とす地の人をカニシヤメと云くより相寄り  
島へ渡りて箱館の湊まきり口教口を渡れり

箱館小船利漁といひはアア此より清船をばり  
三十日船中しといひ五日船中しと云ふと船を  
之くくくくく西より南り陸奥國を花心を又北  
西を指く西へ船をばり日中は西へし利をいひ  
此後京師より魯西亜力船中より十人よりその中より  
天文地理測量の妻夫人のを醫をよきしりる  
之は徳島の學よきしりる人との在る風又雨降る  
りも之よりきくくく此船は何時行く何時  
此雨を何時降知何時行く時ぬと之種をよ  
月をよきしりる船中よりよきしりる船中より  
相寄り船をよきしりる船中よりよきしりる船中より

つゝ海々あのかく日本わらわら何国多やと同く左  
年をきき○是より居りてはわらわら何れと云はれり  
居りてはわらわら何れと云はれり○彼は  
薩摩の國と云く大に笑はれり○又より彼は  
別ふへ〜と云く〜と云く〜と云く〜と云く  
居りてはわらわら何れと云はれり○彼は  
取多〜やと云く〜と云く〜と云く〜と云く  
且魯西豆〜と云く〜と云く〜と云く〜と云く  
並に漕船〜又一艘の小船〜と云く〜と云く  
船〜と云く〜と云く〜と云く〜と云く  
う〜と云く〜と云く〜と云く〜と云く

カ彼〜と云く〜と云く〜と云く〜と云く  
を考〜と云く〜と云く〜と云く〜と云く  
い〜と云く〜と云く〜と云く〜と云く

- 魯西豆國と一里と云く七人〜と云く一回〜と云く
- 一里と云く 中邦七人一回〜と云く五百〜と云く
- 中邦九丁四十〜と云く一回〜と云く
- 西瓜と素瓜乃属國と他〜と云く〜と云く
- 居〜と云く〜と云く〜と云く〜と云く
- 又〜と云く〜と云く〜と云く〜と云く
- 目を慮ふ〜と云く〜と云く〜と云く〜と云く



子まを承りむ事

○本は松根とくく柳根の如し朽れども大木は家祀  
所材ともは松根のみを用ひ松をわ葉を九月の  
比に取れば葉をすめは二三日の松は朽れども小木  
は朽れ花咲きすあゝと云ふと蒲公野の  
朽れども事くはよし

○マホウツカよりヤコウツカへ千里の道をゆく  
おくは生みの人の糧を育み飛鳥して在りしは

○極道のふたれはさ中出りの付流くきよ解れは  
と所暖まをいれは朽腐るくくあゝと云ふは  
家々のそのふれおを流しはは暖れは砌り在り

○旅ま行くは中月の道をゆく候はと云ふは  
さきゆくは往國はありはあり田舎氣は痛く是れ  
よ事りしはをれあり

○市街の家他は右指はひきまゝす多分は高しは二階  
仰りのあゝ一は二階仰り二階仰りのあゝ二階造り  
軒を並へ達ゆき寺は市街に混へ在りはは橋は  
さき二十四五間し及び十文字はあゝまのさきま  
へゆくえは寺は橋は抜ゆくはあり

○魯西亜國をゆくは原野は起出麦粉の屑を喰ひ  
農耕のよめは田圃は往在るは農業すはは  
其業よとく農夫は園圃より登りしははは農業

すゆちの心を素を止て念をふしそふ事と存を  
主輪をし休まらる又夫婦大勢あふ家とて終  
花男入内う寝をメ更奴う白ひて情棄とて  
楽とすゆし

○津方史おとイルコウツカを三本年の二月七日はまむ七千里  
の道行を車とてつるに車れく四十九りてとせし口  
かよなきをう

○雷を何れとも地震何れともあ

○去人の念をソウワリの皮と喜よ用りけは瓶沛  
色真意しと高貴をさ大き一尺と寸位あり  
只價の魯西亜の色と中枚をうし勿論をよ換成

○寒と涼と流く中しともと四五月暖氣よるれい

目の縁口のどろ身鼻頬をそ無き取しとく控し  
着又足をと折れしとくはそめと目鼻身をと

○寒氣をいひてはくと念念の足折しと折し骨を  
折をいひて控切と徳とととと此用をさすをた  
告知すぬとせき氣よ中り離れとありとこの彼中人  
以下よとて

○衣イルコウツカより五都より計車よ駕し馬よ  
車れしとそをさきとつるをうとたれの日行き軽  
きは音物と響き傳はせしと勿論は計のそ中  
跡をわらしとあれは是よと馬よ附とよの終音

二十丁の和をて歩むればは多岐なて之の跡をてし物  
待設ありたよ手回とれしよるる也

○亥九月九日カナリヤ因を船出し南アメリカをて  
船をては舟七曜星小極の足しとあり何れ  
名実なるれいそよを魯西亞人よ回しよ世界  
圖きもふれい七曜星小極の足しとあり名書  
思ひしきにありしをてしとあり心然と船出を  
業とてしよの船をてしとあり

○亥十二月アメリカ海軍兵の活きよる場あり  
日毎に水は海を七のたつよ及び西瓜と東瓜博  
船も船ひしと船をてしとあり

○亥十二月廿二日アメリカを船出し

四日よ船を船せしは此回乃海路一万九千里ありと  
二月下旬の頃ありしは日教四日船も園夜をのち  
形く星一面ありとあり又マリケイスケと婦人  
密通の事ありぬれい女人を放ちて魯西亞人  
いはいへしとありこれ虚言を構へしとありぬる  
彼由し到しは船をてしとあり男子と女子と男子と  
裸身とて四五人半り交易をてしとあり  
陽物陰物を隠すありしとあり又恥らしき物  
とあり中婦人の大なる浅物陰物ありしとあり  
魯西亞人何れ使節しこれをせめて根りありしとあり

大人とも進出〜一日海中へ陥入を帰〜

○五月十二日アメリカを航出〜内系子四月マリケイステへ  
別居まじりつれの由〜船を去るは船中香水  
走〜かりたれの彼大人先の所〜さふ所を足極て  
船よ水を汲んとせ〜水船をさる〜先子船中  
進出され〜その進念をなせんと〜や水を汲むる  
支〜ゆ〜治方なけれ〜る〜彼大人立成船〜呼入  
口救〜のり同夜を〜れ〜船よ〜と酒肴を〜  
魯西五人の内若き人を婦人〜らわ〜る〜あを  
す〜る〜も〜作〜又魯西五人と極の極の扱〜幅七歩  
の扱〜を〜二三寸〜了〜折〜て〜五〜れ〜心〜和ら〜ぬ〜中

思ふなり水を飯〜後方人おも進出〜る〜水思あふ  
婦人足を抱き又肩〜負〜ふ〜る〜海の水〜泡い〜入〜海〜  
り〜沈〜り〜船の〜ま〜る〜を〜る〜る〜海〜き〜ぬ〜る〜人〜救〜え〜る  
人〜斗〜り〜て〜耐〜使〜筋〜力〜り〜く〜海〜は〜固〜執〜な〜れ〜る〜船〜を〜危  
赤綱を〜さ〜る〜人〜と〜さ〜る〜船〜一〜客〜が〜水〜に〜死〜す〜船〜を〜止〜る  
○全船に石火夫を放〜り〜〜と〜ト〜船〜を〜停〜〜一〜客〜を〜筒〜を〜放  
り〜れ〜る〜音〜を〜鳴〜き〜散〜れ〜る〜〜と〜又〜り〜や〜船〜の〜色〜を〜大〜勢  
遊〜き〜ま〜り〜ゆ〜〜茶〜の〜も〜〜壳〜石〜火〜夫〜を〜放〜〜れ〜る〜退〜き  
ま〜り〜〜と〜七〜日〜を〜停〜船〜〜四月十九日帆を〜引〜  
子の方又を子丑と針を〜三〜船〜を〜〜七月上旬カムサス  
カ〜船〜を〜入〜〜

マリケイスケと椰子は多し水沢の上陸せし  
彼等を救ふに舟を操り舟を捕り魯西臣の  
人亦くも艦を以て引割又夫鉄艦を打碎き  
皆せし。夫人の事と金とを合し押割く  
し。是より其人の力なり知れし。

○カムサカを船出し東洋を航せし時魯西臣の人  
を月夜を以て西の方を視て本邦の方を以て  
写し富吉山と名をきし山ありとて此の弁念を  
入る字とす。

○七崎山経行は舟に舟に引回さるる中魯  
西臣國よりわたり船中の遊樂在船の鷗を以て

と阿いふひ、彼處に在り舟を以て生れしと  
りてんれいそ方を答へし。

○魯西臣國より鉄の山ありとて此の事と  
流合を造り、舟の内を以て舟行を仕る。此の  
同船板の舟を以て舟行を仕る。舟の板を  
取し船を以て舟行を仕る。舟の板を以て舟  
大舟を以て舟行を仕る。舟の板を以て舟  
舟の板を以て舟行を仕る。

○魯西臣國より舟を以て舟行を仕る。舟の  
舟を以て舟行を仕る。舟の舟を以て舟行を  
舟の舟を以て舟行を仕る。

○号ハ注の糸粗物多ク又及物ハ秩心悪友在リ  
船ハメ徳ハ在リ利カキ云云

○魯西亜の婦人の式曰或々其母此付と角と心  
長ク二三寸ヲ振下リ牙と鼻孔ハ二本獨々二本を施  
飾りと云始々これをして一併ハ自物と生ハ一ハ牙に  
為キ一ハ

*(Faint bleed-through text from the reverse side)*

此書の末々文化ニ定キ六月中石巻出役の節  
はき更ら宿宿を又七月より一ヶ月乃津浦  
作之出ら宿を以書五一を記しぬれを  
編入人乃名ハ一々彼漂民ハ魯西亜の属高  
了漂民一々中物ハ入信ハ主類ハ遠キハ國王  
の節一々此書小定ラ帰るハ一々の申始ハ仙臺  
侯の侍整大概候後ハ侍古史未を質同ハ一々英  
セハ是書英史ハ一々一々一々一々一々一々  
寸高ハ一々一々一々一々一々一々一々一々  
書ハ一々一々一々一々一々一々一々一々一々  
末ハ一々一々一々一々一々一々一々一々一々

Handwritten text at the top of the page, possibly a title or header.

Main body of handwritten text, consisting of several lines of cursive script.

A small handwritten mark or character located in the lower middle section of the page.

